

晩を、詩を、書し、心、を、
海、を、あ、り、日、幾、無、多、
却

晚 知 詩 画 真 有 得 却
悔 歳 月 幾 無 多

晩を、詩を、書し、心、を、
海、を、あ、り、日、幾、無、多、
却



い。さらにそれぞれの最終面の傾きにも流れに乗った変化があり興味深い。



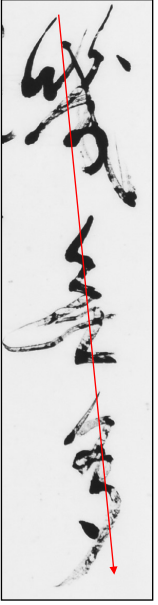
いる。ただ、その傾きに繋がりを感ぜさせる工夫が見て取れる。



字形としてはそれほど大胆な変化は感じられないが、偏の部分の縦画と、旁の大きく回転する部分の線は特に味わい深いものがあり、作品の中でひとときわ光彩を放っている。



した「月」の字形と傾きは絶妙で、是非真似て書いてみてほしい部分になっている。また、右の字の「画」に対応



最後の収めの部分だが、それまでの力強く生き生きとした筆使いから、軽やかでリズムカルなタッチの筆の運びに変化しつつ伸びやかに収めている。縦の動きを意識した字形で、そのまま余韻を残すかのような表現はとても素晴らしい。

今回の課題は、草書を中心とした行草作品で、淀みのない大きな筆の運動と筆使いが作品にスケールの大きさを生んでいて魅力の多い作品になっている。また、行間の響きあいやお互いの影響を受けた駆け引きのようなものも感じられるのも見落とせない部分だ。草書だからと言って運筆のスピードに気を取られ過ぎないようになりたい。細かい筆使いの変化は、熟練の上に成り立つものがあり、ゆっくり書いて早く書いてるように見せるのも必要な技術だ。